

「循環型社会論」受講学生の 森林・林業に関する意識調査

— アンケート「森林と生活に関する意識調査」の結果から —

Opinion Poll on Forest and Forestry Intended for
Attendance Students of Lesson Subject
“Circulated Type Social Theory”

池際 博行

Hiroyuki Ikegiwa

「循環型社会論」受講学生の森林・林業に関する意識調査

— アンケート「森林と生活に関する意識調査」の結果から —

Opinion Poll on Forest and Forestry Intended for Attendance Students of Lesson Subject
“Circulated Type Social Theory”

— As a result of the opinion poll about the forest and the life —

池際 博行

Hiroyuki Ikegiwa

(和歌山大学教育学部)

和歌山大学教育学部国際文化課程学生向けに開講している課程共通科目「循環型社会論」受講生を対象に、4年間にわたっておこなった「森林と生活」に関するアンケート調査の結果から受講生の森林や林業に対する意識や年度による同異を検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 学生は山や森林に対して親しみを感じている。
- 親しみの程度は年度によって大きく異なることはない。
- 受講学生は年毎に山を身近な場と感じてきているようだ。
- 森林の役割を動植物の生息環境の場と強く結びつけて考えているようだ。
- 森林を木材生産の場と考える意識は低い。
- 木材・木質材料の特質を余り意識していない。
- 木造住宅に対するの執着はない。

キーワード：森林、林業、木材、アンケート調査、教育学部国際文化課程学生

1. はじめに

和歌山大学は、和歌山市街中心部から少し北西に外れた、和泉山脈の西端部の中腹にあり、宅地として開発の手が伸びてきているものの周囲の多くはまだ緑に囲まれた地にある。本校教育学部に入学する学生は、大阪府南部地域および和歌山市内の出身が大半を占める。こうした都市部で成長してきた彼等が森林や林業という言葉はどう感じ、それらに対してどのような意識を持っているのかを知ることは、教育学部国際文化課程地域理解プログラムにおいて農林分野を担当する筆者には、単に彼らの専攻選択の可能性を考える上で興味があるという点にとどまらず、典型的な地方都市に学び、将来、日本の社会を担うであろう学生たちの森林や林業に対する意識についての理解を得る助けになると考えられる。そこで筆者は、平成11年から平成14年の4年間に、課程共通科目「循環型社会論」(筆者は分担担当している)を受講した学生全員に対して、各受講年度ごとに同一調査項目で森林と林業に関するアンケート調査を実施し、受講生の年度ごとの意識を

調査し、その変化の有無を調べた。そして、

- ・和歌山大学教育学部学生の森林・林業に対する意識がどの程度か。
 - ・森林・林業に対する意識は年度別入学生によって違いがあるのか。
 - ・世間一般人の意識と大きなずれがあるのか。
- を検討した。

同種の調査研究は、京阪神の高校・大学・一般人を対象に、藤井¹⁾によってなされている。そこでは木材自給や間伐の必要性を強く意識した調査項目が設定されているが、そこに記述された「日本の森林について実情に即した知識を持っている人の割合は、4分の1程度である。」というアンケート結果は注目に値する。本報告は、これに対して、ごく一般的な大学生を対象に、わが国の森林・林業の重要性についてはことさらこれらを強調することなく意識調査を行ったものである。

なお、本調査研究は、科学研究費補助金(基盤研究B)「木によるものづくり教育」を進めるための学校教育と生涯学習におけるプログラム開発(平成13

年度－15年度 分担) “の補助を受けておこなった。

2. アンケート調査について

2.1 アンケート

調査に用いたアンケートは、1999年に総理府がおこなった、「森林と生活に関する世論調査」²⁾を利用した。調査項目は、

- 森林への親しみ
- 森林の役割と森林づくり
- 木材の利用
- 地球環境問題と森林について
- 森林・林業行政に望むこと

をその内容としており、調査項目数は細目を含めて21項目ある。

2.2 アンケート対象者

調査は、1999年度から2002年度までの4年間に和歌山大学教育学部国際文化課程に入学した者で、1年生を対象に後期に開設される「循環型社会論」*受講生に対して、毎年ほぼ同時期に講義時間中を利用して実施した。

国際文化課程の年度毎の入学生数は表1に示すとおりで、調査をはじめた初年度は男性比率が約3割であったが、昨年度は2割と年度を追うごとに女性比率が高まっている。

表1 和歌山大学教育学部国際文化課程入学生数と男性比率

入学年度	入学生数	男性比率
1999年度	57名	31.6%
2000年度	47名	31.9%
2001年度	46名	28.3%
2002年度	47名	19.8%

受講生は本講義を受けるまでは、森林・林業に関する講義を受けるカリキュラム的な機会はなく、従って、アンケートに答える際の知識は高等学校以前の教育ならびに本人の関心に基づく知識にのみ依存していると考えられる。

*科目「循環型社会論」は、国際文化課程地域理解プログラムに属する生活科学および農林科学を担当する教員が分担で受け持つ講義科目で、「市場の論理」「技術の論理」等を優先した社会が生み出した歪み（地球環境問題の深刻化）から脱却し、持続可能な社会を実現するために必要な、生産から流通・廃棄までを考えた消費者について、事例研究：食と農、事例研究：森と生活安全な生活 汚れやゴミ、省エネルギー 21世紀のコンシューマー など具体的な生活問題事例から講義するものである。

アンケートの回答者数は、学生の受講科目選択の都合により入学時の人数とは同じではない（99年－54名、00年－54名、01年－45名、02年－40名）が人数、男性比率は表1とは大きく異なっていない。

3. 結果と考察

アンケートの調査から特徴的と思われるいくつかの項目について結果および検討を行った。

3.1 森林への親しみ

回答者がどの程度森林に関心を抱いているかを年度ごとに比較したものが図1である。同図には総理府が行っている調査結果について一般として右端に付記した。総理府の調査結果は20歳以上の全国無作為抽出

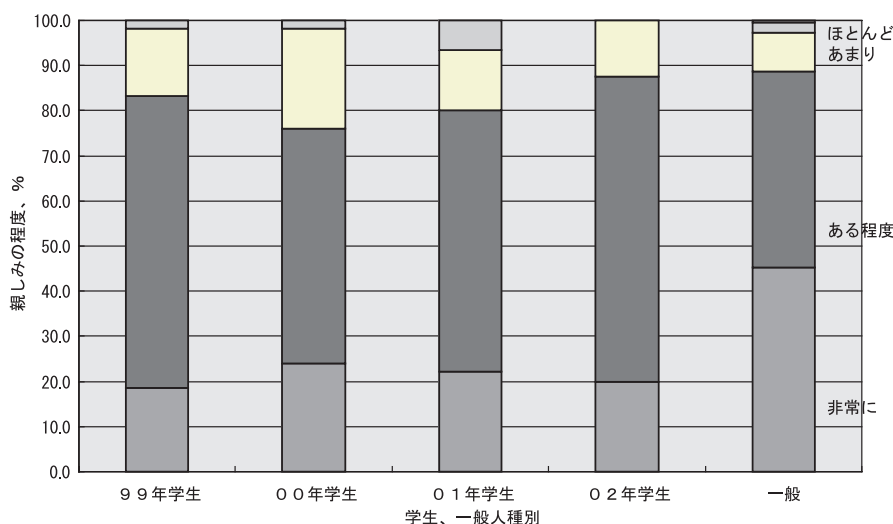


図1 森林への親しみの程度

者3000人を対象にしたものである。(以下、図中に一般として記されたものは総理府調査による結果である。)

この図を見ると、アンケート回答学生は、各年度とも、森林に対して非常に親しみを感じるという割合は20%前後で、総理府の行った調査対象者に比べると約半分と低い、「ある程度」までを含めると80%前後あり、学生たちは多くが森林に対して興味関心を抱いていることが推定できる。また、森林への親しみの程度が年度ごとには増しつつある傾向にある。

3.2 森林とのかかわり

学生たちが実際に山に行き、何らかの形で森林とかかわったかどうかを見たのが図2である。この図は、アンケートに答えた年度に山に行っていないと回答した学生の割合を示しているが、年度ごとの比率は

低下傾向にあり、学生は何らかの形で山や森林と親しむ機会が増えているようである。

3.3 期待する森林の働き

図3は、平成9年度の林業白書³⁾に見られる国民の森林の効用に対する期待内容とその割合を示したものである。

これによると、国民は森林の働きとして自然災害の防止、水資源の確保といった項目に大きな期待を寄せていることがみてとれる。これに対して、学生たちは森林の働きとしてどのような点に期待しており、それが年度ごとに変化しているのかどうかを見たのが図4である。

学生たちの期待する項目は総理府の調査による一般の人々とは違いがあることに気づく。中でももっとも大きな違いは「地球温暖化の防止」、「野生動植物の生

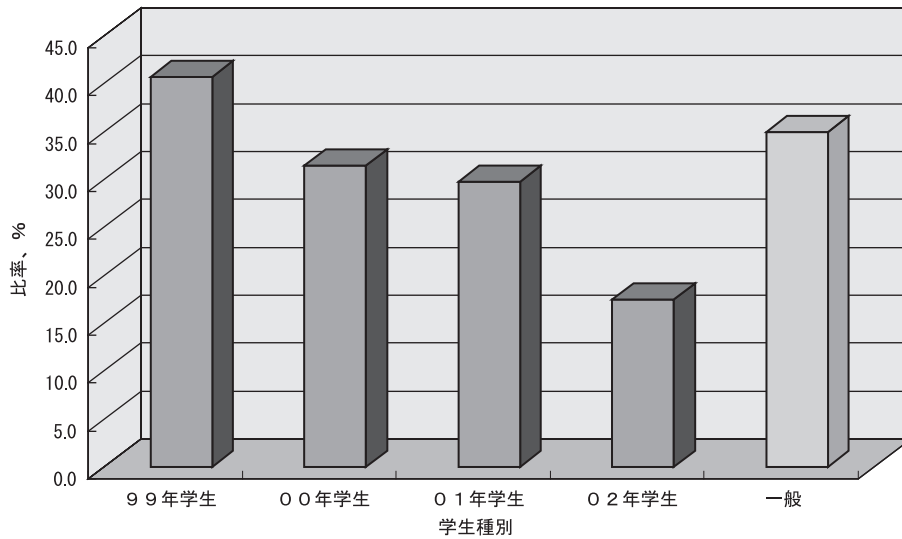


図2 この1年山にでかけたことのない学生の割合

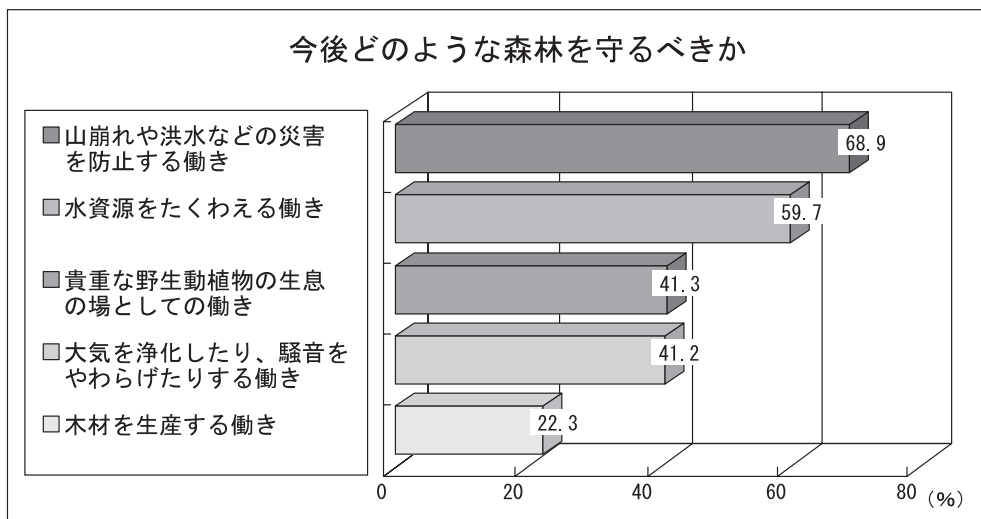


図3 国民に期待される森林の役割 (平成9年度版「林業白書の概要」より)

息の場」としての森林の位置づけへの期待が高い点である。特に前者の「地球温暖化の防止」はここ数年、新聞やテレビ等で頻繁に取り上げられるようになってきており、とりわけ温暖化防止京都国際会議における議論などに学生たちは鋭く反応していることが考えられる。このことは図5に見られるように、学生たちの「地球温暖化の防止」に対する意識が2002年度入学生で特に高まっていることから明らかである。また、後者の「野生動植物の生息の場」としての森林へ

の期待についても環境保全のための森林としての教育や知識の蓄積が小中などの学校教育の場を通してなされてきたことが大きく関与しているのではないかと考えられる。「木材生産の場」「林産物生産の場」としての森林の役割に対してその評価が極めて低い点に関しても、おそらく、学校教育の場でそのような役割についての知識の蓄積がなされていないことが影響しているものと思われる。

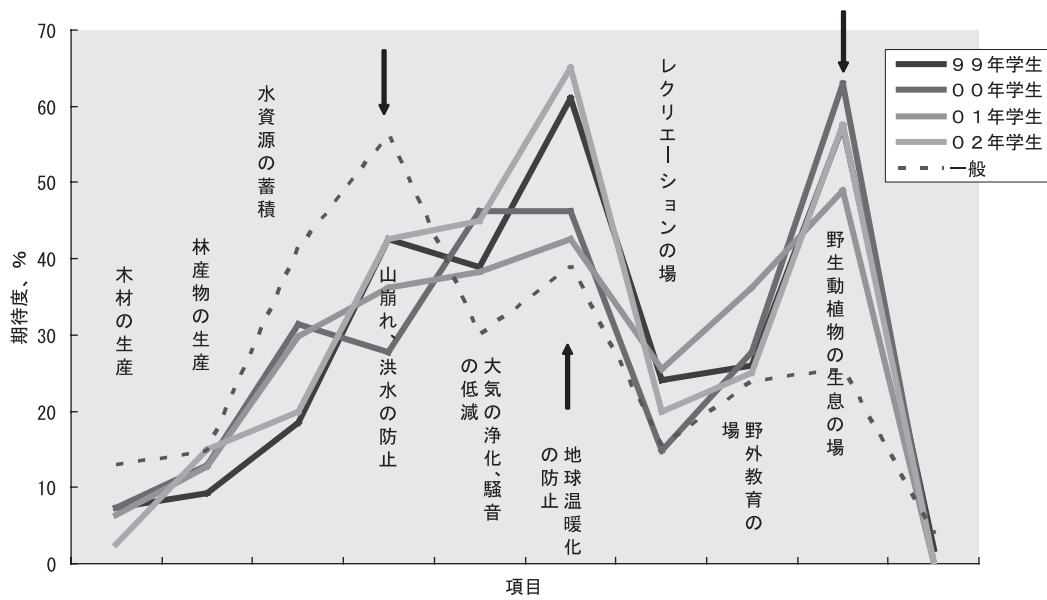


図4 期待する森林の働き

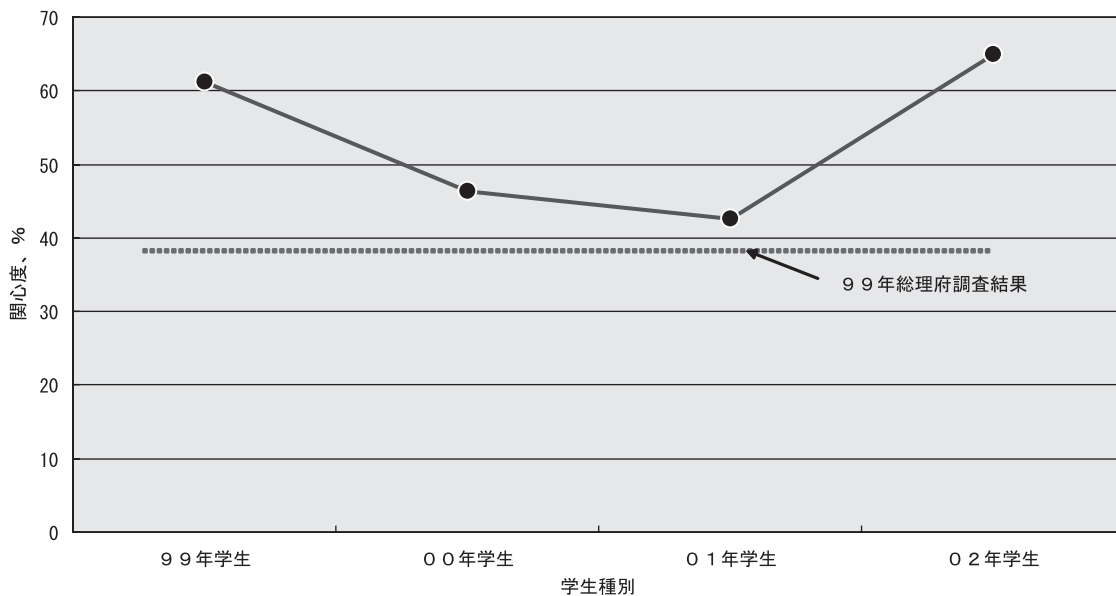


図5 森林の地球温暖化防止に対する関心度の変化

3.4 木材の良さについての関心

木材の持つ良さについて、学生たちはどのような点にそれを見出しているのかについては図6に示した。

これによると、木材が湿度を調節する効果があることについては、取り上げる割合が非常に高い点からみて学生たちは年度に関係なくよく知っているようだ。

一方、温暖化の防止に関係する、製造過程での消費エネルギーが少なく、温暖化の防止につながるという点についての関心はそれほど高くない、むしろ減少傾向にあることが理解しがたい点であった。おそらくなぜ木材を使うことがそのような効果を生じることになるのかについての理解ができないているのだろうと考えられる。

3.5 住宅と木材

木材の需要先として最も代表的なものは住宅である。わが国の代表的な住宅工法はこれまで木造軸組みによる在来工法であった。しかし、大手住宅メーカーは主要な部分を工場によって製造し、現地において組み立てるプレハブ工法を開発、また、阪神淡路大震災によって多くの在来住宅が倒壊する現状を目の当たりにして、とりわけ、北米の2×4工法が注目を受けるようになり、住宅工法は多様性を増した。このような現状の中で、学生たちはどのような住宅を望んでいるかについての結果を図7に示した。

この図に見られるように、在来木造の住宅を望む学生は20%に満たない。この点は99年の総理府の

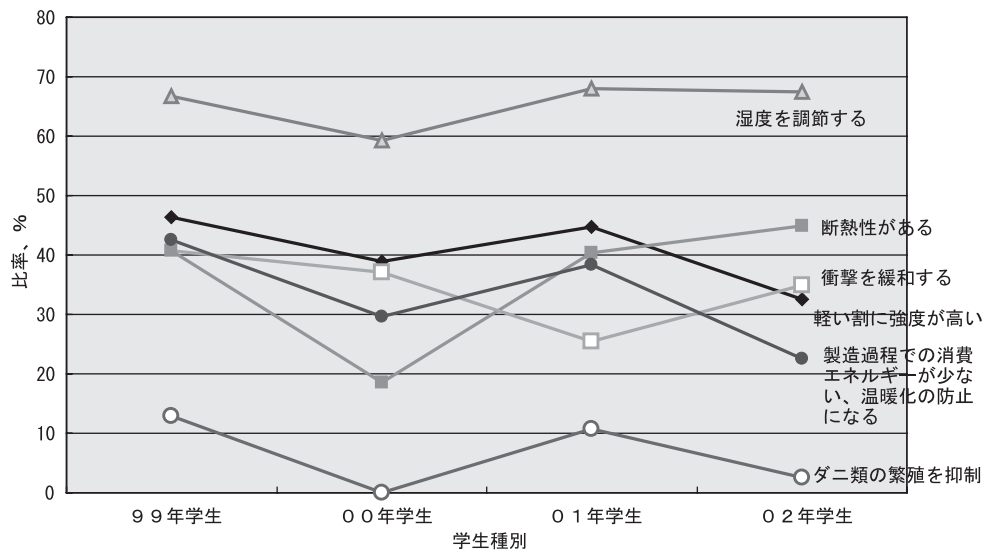


図6 木材の持つ特性に対する認識

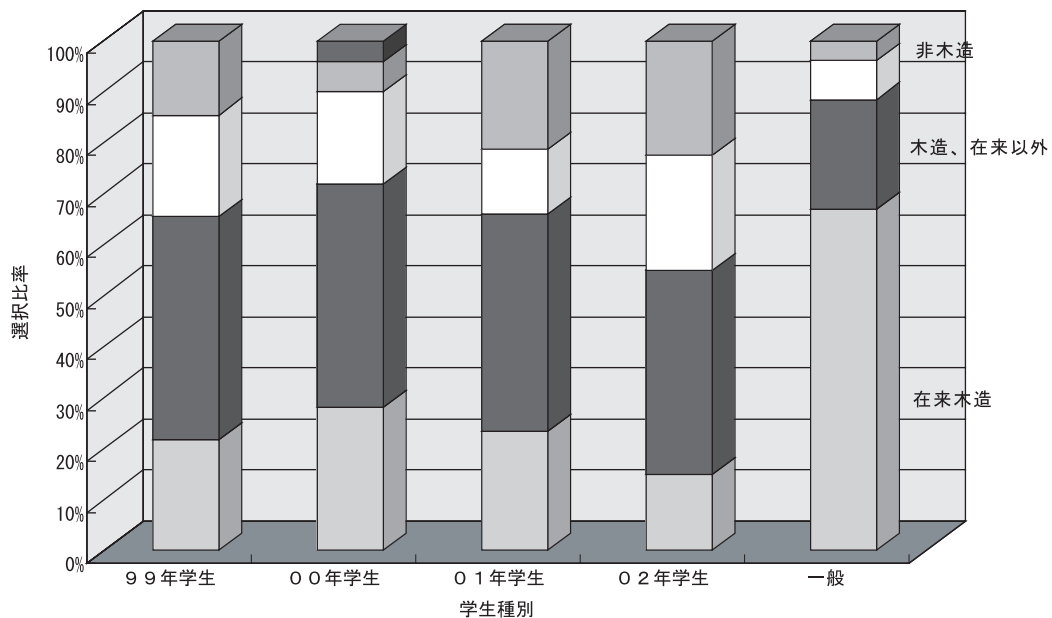


図7 学生の望む住宅の種類

調査対象者の回答とは大きく異なっている。また、その他の工法を含めて木造住宅に対する嗜好は70%を切り、しかも年度ごとに低下している。学生たちは木造による住宅に魅力を感じなくなっているのだろうか。彼らが木造住宅を選択しない原因は今回の調査では明らかではないが、この回答結果は今後の木材関連産業にとって注目すべき示唆を与えていると考えられる。

4. 結論

今回、1999年の学部改組によって新たにつくられた国際文化課程に同年度から2002年度の間の4年間に入学し、「循環型社会論」を受講した学生を対象に森林と林業に関するアンケート調査を行い、彼らの森林や木材に対する意識を調べ、その年度ごとの意識の差異を検討した。その結果以下のような点が明らかになった。

- 学生は山や森林に対して親しみを感じている。
- 森林への程度は年度によって大きく異なることはない。
- 年ごとに山を身近な場と感じつつあるようだ。
- 森林の役割を環境の保全と強く結びつけて考えているようだ。
- 森林を木材生産の場と考える意識は低い。
- 住環境としての木材・木質材料の特質を余り意識していない。
- 木造住宅に対する執着はない。

謝辞

本論文の作成に当たって、数年にわたるアンケートデータを鋭意整理してくれたゼミ生の赤井龍次郎君（現東京農工大学大学院農学研究科）に感謝する。

文献

- 1) 藤井信英：森林と木材利用に関する認識の分析とその課題、木材学会誌、48(6)、449-458(2002)
- 2) 総理府：“森林と生活に関する世論調査”、<http://www8.cao.go.jp/survey/h11/sinrin.html>, 1999
- 3) 林野庁：平成9年度林業白書の概要、<http://www.maff.go.jp/hakusyo/rin/h9a/2htm>